

■ 臼と土公神 ■ ===⇒三州横山話より

家の入口をはいったところの土間をニワと言って、正面に立臼が二つ据えてありました。左手は座敷で、オエだのオデエだのと言って、右に厩（うまや）が設けてあって、鶏の巢は多く厩の上に造ってありました。

臼は北山御料林が伐り払いになったたびに各戸へ一組ずつ下されたものだそうで、一つでは餅を搗き、一つは手杵で、粟や黍（きび）を搗くに用いました。餅を搗く方が上手に据えてありました。

臼を尊重する風習があつて、女が臼を跨げば何より重い罪だといって、過って跨いだときは、その臼を負って、屋根棟を越えさせられるものと言いました。また子供が生まれて、初めて母親の里へ連れて行ったときは、第一番に内いそぎをしないようにといて、臼の中へ入れる風習がありました。

臼の据わっている奥に竈（かまど）が設けてあって、そこに土公神が祀ってありました。多くはそこがカマ屋の大黒柱になっているので、その柱にお札などを入れるところが造ってありました。竈のことをクドと言いました。土公神は鶏を好むと言って、鶏を描いた絵などが柱に張ってありました。また、松を供えるものとも言いました。

万歳は土公神を祭るものと言って、毎年廻ってくる万歳は決まっていて、それが来たときはまず座敷に通して、盆に白米とオヒネリを添えて差し出しました。万歳の方からは、火の用心の札だの恵比寿大黒の札をおいて行きました。奉祝万歳楽などの文字を書いた札をおいて行くのもありました。大沢佐重だの森下金太夫などと言う名を持った万歳が来ました。大沢佐重の偽者が来たなどと言って騒いだことがありました。